次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

環境は生命体に情報を提供することによって、その身体的行為を引きおこす、とギブソンはのべた。さらにかれは、環境のなかでも、陸棲生物にとっての空気や、水棲生物にとっての水を「媒質」と規定し、そのほかのものを「物質」と規定している。空気の振動や光は、たとえば小鳥にタカの襲来を伝える。このように、「媒質」が個々の生命体に情報をもたらすものであるのに対して、「物質」は個々の生命体がそれにむかい、たとえば餌にするものだというわけである。いまここで、①かれの考えをすこしばかり修正しなければならない。たとえば、ヒトの発する酪酸は、たしかに「物質」であるが、しかしダニにヒトの所在をしめす情報としてみれば「媒質」だといってよい。とすると、環境のなかには、個々の生命体とその群れにとって、以下のような三つのものがあることになる。すなわち、(イ)情報を与える「媒質」であるもの、(ロ)「媒質」であって「物質」であるもの、(ハ)個々の生命体がそれぞれに固有なしかたでカップリングする「もの」、たとえば生命体が生きるためにセッシュしなければならない養分である「もの」。

このように見てみれば、ギブソンのいう「アフォーダンス」、つまり環境が生命体に情報を伝える働きが、古くから、「媒体」または「媒質」とよばれているものであることが明らかになる。だとすれば、生命体それぞれにとって環境は、それぞれの生命体が関わってゆくものを含むばかりか、それらの身体的行為を引きおこす「媒体」をも含んでいるといってよかろう。さらに、「媒体」について考えてみよう。

たとえば、ここにカシワの木々が繁っているとしよう。少女にとっては、童話的世界を育む場である。リスにとっては、餌にありつく場である。ダニにとっては、哺乳動物をまちかまえる場である。ところがダニにとって、カシワの木々は、たしかに哺乳動物をまちかまえる場であるが、童話的世界を育む場ではないはずである。さらにまた、同じカシワの木に棲んでいても、ダニにとって、少女の発する酪酸は、その身体的行為を引きおこす媒体であっても、リスにとっては、ダニのような身体的行為を引きおこすものではない。その逆に、リスの身体的行為を引きおこす媒体は、ダニにとっての媒体ではありえない。とすれば、同じ場にいながらも、どの生物に、どのような情報がもたらされて、どのような身体的行為が引きおこされるかは、それぞれの生物によって異なっているということになる。それゆえ媒体は、ある生命体に情報を伝えて、それ固有の身体的行為を引きおこすものであるわけである。かくて、ある生命体の引きおこされた身体的行為が、たとえばダニがヒトに飛びうつるように、②観察者にとって能動的なふるまいにみえるのである。ところが、ヒトの発する酪酸がダニにとって媒体であるとき、ヒトはダニの身体的行為を引きおこすものとみられてはいても、ヒトの身体的行為はみられてはいない。要するに、媒体は、ある生命体の身体的行為を引きおこすけれども、ほかならぬ媒体となったものの能動的なふるまいを観察者にみせないものなのである。

ところで、環境を、個々の生命体やその群れをかこんでいる境域として考えてみよう。いま、カシワの木々を、環境という境域の全体に譬えてみよう。カシワの木々は、さまざまな生命体にとって必要なもの、たとえば養分となるものを備えているとともに、さまざまな生命体のそれぞれに固有の身体的行為を引きおこす媒体にみちている。ところが、多種多様な生命体が同じカシワの木々という境域に棲みながらも、それぞれの生命体にとって、必要なものや媒体となるものの意味内容は異なっている。別のいい方をすれば、ある生命体にとって媒体であることは、別の生命体にとっては、別の身体的行為の媒体であることもあるし、全く身体的行為を引きおこさないこともあるわけである。とすれば、境域としての環境は、物理学的空間としては、ひとつの全体であるけれども、しかしそれぞれの生命にとって異なった意味をもっていることになる。それゆえ、環境という境域は、多種多様な生物それぞれに固有の必要なものや、それぞれに固有の身体的行為を引きおこす媒体にみちているがゆえに、等質の単一な全体としてあつかわれてはならないといえよう。

くりかえすまでもなく、生命体の身体的行為は知覚と身体運動に依っている。だとすれば、多くの知覚と、動きまわる四肢をもった生命体であればあるほど、環境のなかのより多くのものが、そのような生命体に固有のさまざまな身体的行為を引きおこす媒体となるのではないか。たとえば、オオカミにとって、川やミズウミはカワきをいやす情報をもたらし、空は天候の情報をもたらし、森は天敵の気配を伝えるだろう。とすれば、環境のありとあらゆるものが、それぞれの生命体に情報をもたらし、それぞれの身体的行為を引きおこすかぎり、それらは媒体であるといえよう。そのような意味で、*Th・ユクスキュルは、「環境は身体的行為の媒体である」といっている。要するに、それぞれの生命体をかこんでいる境域としての環境のありとあらゆるものが、生命体それぞれの身体的行為の媒体であるというわけである。

それにしても、③環境のありとあらゆるものが身体的行為の媒体であるとは、どういうことなのか。生命体が知覚しえないありとあらゆるものが媒体である、ということなのか。時間軸に沿ってみたとき、地球がタンジョウして以来の古層の大地をも媒体とみなすのか。あるいはまた、空間軸に沿ってみたとき、大宇宙から地上にふりそそいでいる宇宙線もまた、媒体とみなすのか。たしかに、環境のありとあらゆるものが媒体であるにしても、個々の生命体がそれ自身の知覚において情報をえて、それ固有の身体的行為をおこなわなければ、媒体としての役目をはたしていないといえよう。

ところで、もしも環境が激変したならば、多くの生命体が生きてゆけなくなろう。けれども、環境のわずかの変化があっただけならば、生命体の生きるに必要なものや、多くの媒体が環境から失われるにしても、生命体それぞれの身体的行為は、変化に対応した細々としたしかたであるが、同じでありつづけるのではないだろうか。なぜなら、環境のなかの媒体は、それぞれの生命体と、その群れに固有の身体的行為を引きおこしはしても、それらの身体的行為を決定したり、司令したりするものではないからである。重ねていえば、媒体が少なくなるような事情のもとでも、同じ身体的行為がありつづける。してみると、Ⅰ生命体の絶滅にみちびくような激変が環境におきないかぎりは、Ⅱ環境が生命体の生命活動のすべてを決定するという、いわゆる環境決定論は成りたたないといえよう。とはいっても、環境のなかの媒体がなくてもよいというわけではない。というのも、媒体がなければ、それぞれの生命体とその群れに固有の身体的行為が引きおこされはしないし、環境のなかのさまざまなものとのカップリングができなくなってしまうからである。

見られたように、④境域としての環境は、それぞれの生命体が生きるに必要なものや、それぞれの生命体に情報を与えて、それぞれに固有の身体的行為を引きおこす媒体を備えている。この媒体のおかげで、それぞれの生命体は、環境のなかのさまざまなものとたがいに浸透しあうことができるわけである。そのかぎりにおいて、境域としての環境が、さまざまなものや媒体を備えているとの意義はハカりしれない。ところが、媒体によって引きおこされる身体的行為は、環境に激変がおきないかぎりは、同じでありつづける。また、生命の自己再生産も、同じようにくりかえされてゆく。とはいっても、やはりさまざまなものや媒体は、生命体にはなくて、境域としての環境にあるのだから、Ⅲ生命は環境に関わらざるをえない生命なのである。このような生命であることを、生命体の側からいえば、それぞれの生命体の身体的行為が媒体によって引きおこされるということであるし、それぞれの生命体が環境から身を閉ざしてはおれないということなのである。

（竹田純郎「生命の哲学」による）

（注）ギブソン…J・J・ギブソン、アメリカの認知心理学者。
カップリング…生命体が、他の生命体や環境と関係を持つこと。
Th・ユクスキュル…Th・v・ユクスキュル、ドイツの医学者・生物学者。

問一　――線a～eの漢字と同じ漢字を含むものを次の各群のア～オから一つずつ選び、記号で答えよ。

a セッシュ
ア 大自然のセツリ。
イ クッセツ率を計算する。
ウ ヨウセツ工場で働く。
エ セツレツな文章。
オ セツドある振る舞い。
〔　ア　〕

b ミズウミ
ア 山水画のコタンな風景。
イ 監督が選手をコブする。
ウ 乗組員をテンコする。
エ 血液がギョウコする。
オ コショウの生物を採集する。
〔　オ　〕

① ギブソンの考え
② 筆者の修正

c カワき
ア キョウカツの容疑で逮捕される。
イ エンカツに会議を運営する。
ウ 平和をカツボウする。
エ 新天地にカツロを開く。
オ 内容をガイカツする。
〔 ウ 〕

d タンジョウ
ア 作品をタンネンに仕上げる。
イ 作家のセイタンの地をたずねる。
ウ ダイタンな行動をとる。
エ 悲しみのタンソクをもらす。
オ タンセイな顔立ちの少年。
〔 イ 〕

e ハカり
ア ニソクサンモンの価値もない。
イ 新しい事業をソクシンさせる。
ウ ヘンソク的な動詞の活用。
エ オクソクにもとづく報道。
オ イッショクソクハツの状態。
〔 エ 〕

問二 ——線①「かれの考えをすこしばかり修正しなければならない」とあるが、筆者によってギブソンの考え方はどのように修正されたのか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア ギブソンは、環境が生命体に情報を伝達することが身体的行為を引きおこすと述べていたが、筆者は環境のなかには個々の生命体を誘導する固有の「物質」があることを指摘した。

イ ギブソンは、「媒質」が生命体に情報をもたらすもので「物質」は生命体の餌のようなものとみなしたが、筆者は情報をもたらし餌にもなるような両義的なものを追加した。

ウ ギブソンは、「媒質」と「物質」を生命体を支配する環境の二つの働きとしてとらえたが、筆者は「媒質」であると同時に「物質」でもあるような場合として「媒体」という概念を発見した。

エ ギブソンは、環境の発する情報と生命体の身体的行為との密接な関わりを指摘していたが、筆者は情報の内容を「媒質」と「物質」という言葉でより具体化した。

オ ギブソンは、生命体に関わる環境の働きを説明する概念として「媒質」「物質」を用いたが、筆者は酪酸を例に「物質」も究極的には「媒質」になると単純化した。

〔 イ 〕

「媒体」が話題になっている。

問三 ——線②「観察者にとって能動的なふるまいにみえる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 媒体は生命体に有益で限定された情報を伝達するので、あたかも生命体が特定の対象に対して意志的に行動しているようにみえる。

イ 媒体が生命体に及ぼす働きは目に見ることはできないので、あたかも生命体が特定の対象に対して意図的に行動しているようにみえる。

ウ 媒体は生命体に価値ある特有の情報しかもたらさないので、あたかも生命体が特定の対象に対して選択的に行動しているようにみえる。

エ 媒体が生命体に与える影響は把握することが困難なので、あたかも生命体が特定の対象に対して自主的に行動しているようにみえる。

オ 媒体は生命体にそれ固有の反応を引きおこさせるので、あたかも生命体が特定の対象に対して自発的に行動しているようにみえる。

〔 オ 〕

問四 ——線③「環境のありとあらゆるものが身体的行為の媒体である」とあるが、筆者はこれに対してどのように考えているか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア たとえば古層の大地や宇宙からふりそそぐ宇宙線などがそうであるように、たとえ生命体が知覚していなくても、生命体を囲んでいるものすべてが媒体である。

イ 古層の大地や宇宙からふりそそぐ宇宙線といったものは、環境が変化しない限り生命体の身体や行動に影響を及ぼすことがないので、媒体であるとはいえない。

ウ オオカミにとって空や森にいたるまでが媒体であるといえる以上、地球が生まれて以来の古層の大地や宇宙からふりそそぐ宇宙線もまた、媒体であるといえる。

3つの要素の内容説明と論理的関係

エ 古層の大地や宇宙からふりそそぐ宇宙線は、生命体にそれ固有の身体運動を引きおこせば媒体であるといえるが、引きおこさなければ媒体とは認められない。

オ たとえばオオカミのように多彩な知覚をもって広い範囲を動きまわることができる生命体は、環境のなかのありとあらゆるものが媒体となる可能性がある。

〔 エ 〕

問五 ～～線で示したⅠ「環境が激変したなら」、Ⅱ「環境決定論」、Ⅲ「生命は環境に関わらざるをえない」について、それらの三箇所の論理的関係を示すとどのようになるか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 生命体は、多少の環境の変化にも対応して生きのびる独自の力を持つ。しかし他方、環境からものや媒体を取りこむ以上、環境決定論的側面をも持ち合わせており、両者から判断して、生命は環境に関わらざるをえないと考えられる。

イ 環境の激変といっても程度は異なり、環境決定論の考え方のように生命体が環境から命令されることはない。生命体は自らの意志によって環境と関係するのであり、生命が環境に関わらざるをえないとは、あくまでその意味である。

ウ 生命活動をⅡ環境の従属物と考える環境決定論は、Ⅰ環境の激変による生命体の絶滅といった極端な例にしかあてはまらない。とはいえ生命体にⅢ必要なものや媒体は環境のなかにあるのであり、生命はそのなかでしか生きることはできない。

エ 環境のなかにいない生命体というものが考えられない以上、環境決定論を簡単に否定することはできない。生命は環境に関わらざるをえないという思想は重要であり、その最もよい例が、自然災害などの環境の激変の時である。

オ 環境の激変でもない限り、生命体は存続し続けるのであり、環境決定論的な考え方は否定すべきである。しかしそれは環境を軽視してよいということではなく、生命が環境に関わらざるをえない以上、環境の保護は重要である。

〔 ウ 〕

問六 ——線④「境域としての環境」は、本文中でくり返し使われているが、それにはさまざまな特質がある。その説明として適当なものを次のア～カから二つ選び、記号で答えよ。

ア 生命体はそれぞれ固有のものや媒体に対応しながら生命活動を維持し、その種類や質もさまざまである。それゆえ空間的に限定された環境といえども、そのなかでは生命体独自の多様な活動が展開されており、単一のまとまりではない。

イ 環境という言葉から物理的な広さを持った空間を考えがちであるが、生命体にとって広さは重要ではない。たとえ一本のカシワの木であれ、そこにさまざまな生命の営みがある限り、それは境域としての環境と考えなければならない。

ウ 多種多様な生命体にとって、生命活動に必要なものや媒体はそれぞれ異なっており、生命活動の舞台となる物理的空間は、その多様性を満たすために複雑化している。環境が生命活動を支配するのは、まさにこの複雑な対応関係による。

エ たとえばリスにはリス固有の媒体があり、ダニにもダニ固有の媒体がある。しかし一方それらの生命体は生息する場所を同じくするのであり、そのためには多様な生命活動を一つにまとめる働きとして境域としての環境が必要となる。

オ 生命体にとって環境が重要なのは、そこからものや媒体を与えられるからである。生命活動や自己再生産を保証するには、環境は多少の変化にも耐えうるものでなくてはならず、境域としての環境にはそのような条件が必要となる。

カ 生命体にとって森や川などの自然があるだけでは十分ではない。個々の生命体が身体的行為を展開するために不可欠なものや媒体が存在し、環境と生命体がそれらによって関係を結ぶことのできる場こそが、境域としての環境である。

〔 ア 〕〔 カ 〕